

～小さな発見が生まれる～ 下線部は小さな発見を豊かな経験につなぐ教師の援助

実践事例前の姿

園庭では、各学年がヒマワリやキュウリ、トマトなど、様々な野菜や植物をプランターで栽培していた。

3歳児は、毎日登園後に教師と園庭に出て自分たちが育てているトマトに水やりをしながら、トマトが赤くなっていることに気付いたり、他学年が植えたヒマワリの生長に気付いて背比べをして喜んだりしていた。

また、5歳児が収穫したキュウリを見せてもらったり触らせてもらったりして他学年と関わる中で、自然への親しみを感じるようになった。

【小さな発見】

- ・教師と一緒に毎日水やりをすることをきっかけに、自分たちが栽培しているトマトが赤くなっていることや、他学年の栽培している植物が大きくなっていることに気付いた。
- ・4、5歳児が収穫したものを分けてもらい、実際に触ったり食べたりする喜びを感じた。



～小さな発見が生まれる～

感覚・言葉との出会い

日課にしている水やりの後、教師が「年長組さんのキュウリ、おいしかったね。どこにあるのかな。」とつぶやきながら畑の周りを歩き始めると、A児も「探してみよう。」と教師の後についてきた。トマトやピーマンなど栽培している植物を見てから、教師が「この辺りにあるかな？」と言いながらキュウリのプランターを覗き込んだ。A児も教師のまねをして覗き込んだ。A児が大きなキュウリの葉をじっと見て「先生、見て！」と言ったため、教師は「わあ、大きな葉っぱだね。」と受け止めた。教師が「みんなの手より大きそうだね。」と言うと、A児は自分の手をキュウリの葉に当て、「大きい！」と言った。それから教師がキュウリの葉を指で触ったりつまんだりすると、A児も同じように触った。すると目を見開き、驚いた表情で教師の顔を見てきた。教師が「びっくりした？チクチクするね。」と言うと、A児は納得したように大きく頷き「チクチク！」と言った。それからようやく視線を上に向け、キュウリの実がなっていることに気付いた。

【小さな発見】

- ・葉が大きいことに驚いた。
- ・自分でキュウリの葉を見て触り、初めての感覚に驚いた。
- ・新しい感覚を表す言葉「チクチク」に出会い、体験と言葉が繋がった。
- ・自分が触れた葉がキュウリの葉であることに気付いた。



※この実践事例では、幼児の小さな発見は生まれているが、豊かな経験までには至っていないと考えるため、小さな発見のみ表記している。

【幼児の小さな発見を豊かな経験につなぐ過程で必要な教師の援助】

○教師自身が自然と関わる姿を見せたり、幼児と一緒に園庭の自然や栽培している植物に関わったりすることで、幼児も自然への関心をもち、直接体験をすることにつながる。

・教師が幼児と一緒に園庭の自然や栽培している植物を見に行くことで幼児も興味や親しみをもち、プランターを覗き込んだりキュウリの葉っぱを見付けたり、触ってみたりする姿につながった。

○教師が幼児の思いを受け止め共感することで、幼児は喜びを感じ、体験したことを自分なりに表すようになる。

・日々の生活の中で、教師が幼児の思いを受け止めて共感したり代弁したりすることで、教師と幼児の信頼関係が深まっていく。言葉にならない幼児の感動を受け止めたり代弁したりすることで、幼児が気付いたことや感じたことを自分なりに伝える喜びを感じられるようにする。

○他学年の担任と連携しながら幼児同士が関わる機会を意識して取り入れることで、上の学年から下の学年へと経験につながる。

この事例では幼児の小さな発見は生まれているが、単発的な姿であり、豊かな経験には至っていない。後の園生活の中で、教師が幼児の小さな発見を読み取り、この日の経験とのつながりを意識しながら援助することで、豊かな経験につながる。